

◆書評◆

井谷聡子著

『〈体育会系女子〉のポリティクス

身体・ジェンダー・セクシュアリティ』

(関西大学出版部 2021年 ISBN 978-4-87354-732-9 2000円+税)



鈴木 楓太

(京都先端科学大学 健康医療学部)

自らを「ジェンダー・クィア」と表現する著者は、日常的に不審や好奇の目を向けられてきた(ジェンダー・ポリシング)自身の「女らしさの欠如」が、アスリートであるという条件のもとではすんなりと受け入れられ、しかも競技レベルが上がるにつれてその傾向が一層明確になるという経験をした。近代スポーツが極めて同性愛嫌悪的でトランス嫌悪的なものであるならば、筆者が日本のスポーツ空間を社会の性規範から逃れることができる「安全な空間」として認識したことを、どのように説明できるのか。従来の理論では掬い取れないこの認識を言語化することへの強い欲求から生まれた本書が問うのは、日本におけるジェンダーとセクシュアリティのポリティクスが、「男らしい女子選手」の言説構築に立ち現れる、そのありようである。

本書は、「はじめに」と終章に挟まれた三部六章から構成されており、日本では一般に「男のスポーツ」と考えられてきた

サッカーとレスリングをプレーする「女子選手」(本人の性自認とは関係なく、社会からそのように見なされているという意味での)に焦点を当てている。そして、選手たちの主体性が、メディアや指導者といった他者による言説構築と選手自身による言説構築の折衝を通じてどのように構成されるのかを明らかにする。

第I部「いくつかの前提」では、まず北米と日本の研究の到達点を整理したうえで、ジェンダー、セクシュアリティ、人種、国民アイデンティティのインターセクショナルな視点の導入が課題であることが示される(第一章)。そのうえで、そうした交差性のなかで「男らしい女子選手」の主体を考察するために援用する諸概念が検討されている。ポスト構造主義理論の主体性概念やフーコーの「言説」と「知／権力」、バトラーの「パフォーマティビティ」、ムニョースの「脱同一化」等の概念がそれである(第二章)。

第II部「メディア言説構築」は、サッ

カーとレスリングをプレーする女子選手に関する主流メディアによる言説構築の分析である。日本代表として世界的な名声を得たことで、それまで性規範から外れた「変わった」女と見なされてきた女子選手たちを、規範的な「日本女性」像に組み込む必要に迫られたメディア言説が抱えたジレンマは、「女」の言説構築に亀裂や矛盾といった「ジェンダー・トラブル」を引き起こした。と同時に、実に様々な言説戦略によってそのズレや亀裂を修復し、女子選手のマスキュリニティを日本社会のジェンダー規範に回収しようとした。日常の「外」で自己鍛錬に励む「体育会系女子」や、本人の責任に帰されない「体育会系のDNA」は、こうした言説戦略の一つである(第三章)。さらに第四章では、「国民アイデンティティ」や「民族の政治」との交差性に焦点を当てている。当初は日本女性の規範的「女らしさ」とされていた清貧さや忠実さといった性質が、欧米コンプレックスと東アジア諸国に対する「植民主義的健忘」を媒介しつつ、次第にジェンダーを超えた「日本人」のアイデンティティとして語られるようになった。著者は、その過程が家父長的、帝国主義的欲望を内包した日本国民のマスキュリニティを回復、強化する試みでもあったと指摘する。

以上のようなメディア言説は、性別二元性や男性中心性を巧みに維持し、クィアな存在を不可視化しながら絶えず構築

される一方で、ジェンダー・クィアの人たちがジェンダー・ポリシングを受けずにマスキュリンな自己表現をすることを可能にする、「安全な空間」をスポーツが生み出す可能性を示している。

第Ⅲ部「言説の物質化と身体、主体性」では、サッカーとレスリングをプレーする「女子選手」へのインタビューを行い、規範的言説との折衝を通じて選手たちのジェンダー化された主体性が構築されるプロセスが分析されている。当然のことながら、その過程は実に複雑かつ多様であるが、ここでの発見の一つは、スポーツ空間では女子選手の「男らしさ」と同じくらい「女らしさ」が、問題視されているということであった。社会からの「女らしくあれ」という要求と、スポーツ界からの「女になるな」という矛盾した、そしてほとんど支離滅裂な要求に折り合いをつけながら、「選手たちは化粧っ気がなく短髪で、『可愛らしい』服を着ない(着ることができない)、筋肉質で力強い「体育会系女子」として身体化されていく」(187-188頁)。第六章では、シスジェンダーではない二選手の語りを中心となる。両者はそれぞれにユニークで創造的なやり方で既存の言説資源を様々に引用しながら、ジェンダー化された主体性を少しずつ構成していた。「男のスポーツ」に参加することは、そうした営為の一つである。そして、こうした折衝の過程には、「自然」に見えるアイデンティティ・カテゴリーの行為遂行

性、そして規範的トランス言説が見せる権力／知の効果がよく表れている。

最後に、終章では、トランス選手に対する近年のバックラッシュにも言及しながら、本書が記述してきた「女子選手」の主体性構成の創造的なプロセスが示唆する、スポーツとジェンダー、セクシュアリティの関係性のオルタナティブをさらに押し広げることが提起された。

正直に言うと、どちらかといえばオーソドックスな歴史研究が性に合う評者が、「体育会系女子のポリティクス」の理論化を目的とする本書をどれくらい「読める」のか、少し不安だった。しかし、女性選手の言説構築をめぐる丁寧で周到な記述に惹きつけられ、感動すら覚えた。「女子選手」たちが、既存の言説資源を折衝して主体性を構築するプロセスは実に多様で複雑だが、そこには常に、相矛盾する複数の女性像の間の緊張関係が存在すると同時に、それを修復し、ジェンダー規範に回収しようとする知／権力が介在している。本書は、この両義性をおびた言説構築の過程に内包された多様さと複雑さを捨象せず丹念に記述することで、「日本女性」や「体育会系女子」、「トランスジェンダー」といった認知カテゴリーの構築性と行為遂行性を説得的に記述している。本書を読むという行為自体が、読者にとって（そしておそらく著者にとっても）ジェンダー化された主体性をパフォーマンスタイプに構成する過程に他ならないのではないだろうか。

また、本書は北米のスポーツ研究の「白人中心性」を乗り越えるインターセクショナルな視点の重要性を提起するが、そうした欧米の理論が日本の研究にそのまま当てはめられる傾向にあるのは、日本の研究自体が「中流の日本人女性」を前提としてきたことと不可分である。本書は、スポーツ研究において欧米の理論を日本の研究に応用する際の道標ともなろう。「体育会系女子」という日本に特有の認知カテゴリーがこうした交差性のなかにどう位置づくのかについては、さらに精緻化されることを期待したい。

なお、研究の方法としてデプス・インタビューを採用したとしているが、複数のインタビュイーが同席している場合もあったようだ。このことは、主体性の構築を分析するうえでどのように影響したのだろうか。また、著者も言及するように、現在のバックラッシュでは主にトランス女性の選手が激しい攻撃に晒されている。これがセクシズムの一側面であることを踏まえれば、「異なるスポーツとジェンダー、セクシュアリティの可能性」を提示するには、トランス女性の言説構築と主体性構成までを含めた理論化が必要であろう。先行研究の不在により、選手の主体性構築の前提となるメディア言説の分析から、字義通り一から作りあげた本書の成果と課題が、日本のスポーツとセクシュアリティ研究を活性化させることは間違いないだろう。